

# 京都大学

## 取組名称: 大学院地球環境学舎インターンシップ

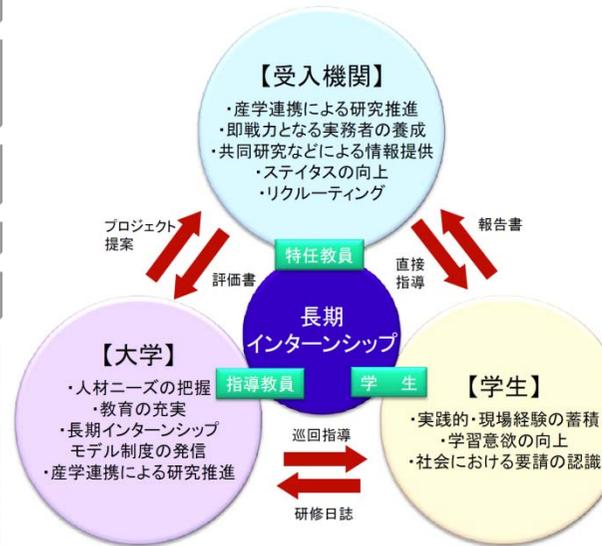
### 【取組概要】

長期インターンシップ(3~5ヶ月)による地球環境問題の課題抽出・解決方法の習得、大学における授業・知識、研修先企業等の研修指導責任者を特任教員とすることによる教育効果を組み合わせ、産学連携による人材育成、研究の推進を図る。具体的には、①プロジェクト・共同研究型のインターンシップとし、修士論文研究へ発展させる点、②指導教員と特任教員が協働して、指導・成績評価、成果発表、修士論文研究の立案・指導を行う点、等の特徴とする。

### ● カリキュラム上のインターンシップの位置付け



### ● 個々の役割と期待する効果



### ● ある年度の学生派遣実績

インターンシップ実施機関	派遣人数(延べ)
国内の民間企業(例:アミタ、宇部興産、大成建設、電源開発、三菱UFJリサーチ&コンサルティング等)	14
NPO、NGO等の各種法人(例:環境市民、こども環境活動支援協会、里山ネットワーク世屋、地球環境戦略研究機関等)	19
海外の企業、国際機関(SEEDS Asia、Centre for Initiatives and Research on Climate Adaptation 等)	14
国内の研究機関(森林総合研究所等)	4
その他(産学連携以外の形態)	4

### 【成果等】

- 産学連携による実践型人材育成:5年間に181人が長期インターンシップを実施(学生による授業評価点4.7点(5点満点))。受入機関指導担当者のうち42人が特任教員に着任し、修士論文研究を含めた指導に従事。
- 実践型人材育成基盤の整備:210機関以上の機関が参画。大学と修了生の間での人的ネットワークの形成。
- 産学連携の共同研究プロジェクトの獲得・実施。
- 事業成果の社会への発信と情報共有:成果報告書、WEBによる実施運営体制を含めた成果の公開。

# 産学連携による実践型人材育成事業 ―長期インターンシップ・プログラム開発― 最終評価結果

<b>大 学 名</b>	京都大学
<b>教育プロジェクト名称</b>	大学院地球環境学舎インターンシップ
<b>事業責任者</b>	大学院地球環境学舎/学舎 地球環境学舎長 教授 小林慎太郎

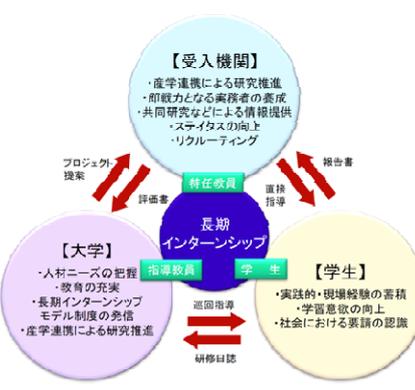
## 事業概要

長期インターンシップ(3~5ヶ月)による地球環境問題の課題抽出・解決方法の習得、大学における授業・知識、研修先企業等の研修指導責任者を特任教員とすることによる教育効果を組み合わせ、産学連携による人材育成、研究の推進を図る。具体的には、①プロジェクト・共同研究型のインターンシップとし、修士論文研究へ発展させる点、②指導教員と特任教員が協働して、指導・成績評価、成果発表、修士論文研究の立案・指導を行う点、等の特徴とする。

### ● カリキュラム上のインターンシップの位置付け



### ● 個々の役割と期待する効果



### ● ある年度の学生派遣実績

インターンシップ実施機関	派遣人数 (延べ)
国内の民間企業(例:アマタ、宇部興産、大成建設、電源開発、三菱UFJリサーチ&コンサルティング等)	14
NPO、NGO等の各種法人(例:環境市民、こども環境活動支援協会、江山ネットワーク世屋、地球環境戦略研究機関等)	19
海外の企業、国際機関(GEES Asia, Centre for Initiatives and Research on Climate Adaptation等)	14
国内の研究機関(森林総合研究所等)	4
その他(産学連携以外の形態)	4

## 最終評価結果

(総合評価) S: 所期の計画を超えた取組が行われた

### コメント

#### 《優れた点》

- 本プログラムは、地球環境問題解決に率先して取り組む高度人材養成を目指しており、国から企業までの組織でもこれから最も必要とされる人材養成領域を対象としたものである。実施に当たっては「地球環境問題に関わる人材養成プログラム」として、国内外の企業や団体と連携し、多様・多元なテーマを選択、産・学・学生相互の熱心な話し合いに基づいて柔軟に推進している。計画、実施方法、実施内容、評価方法・体制など、人材養成のモデルケースとなり得るレベルの高い内容になっている。プロジェクト・協同研究型のインターンシップとして修士論文研究に発展させる工夫を組み込んでいる。5年間で182名の修士課程学生又は博士前期課程学生の積極的な参加、外国人留学生への対応、カリキュラムへの専攻に応じた取り込み、延べ43名の特任教授・講師の就任、派遣先として150機関の協力など、プロジェクト体験型インターンシップの実践として際立った取組が行われ、注目すべき成果につながった。
- 成果の公開と他大学との連携・共有、そして国際的なプログラムにおいても、シンポジウムや報告書の配布、HPでの発信などによって、中間評価で指摘した情報の公開性がしっかり高められた。本プログラムの事後展開として、他研究科でカリキュラムへの成果の取り込みが実践されていて波及効果は大きい。
- 長期インターンシップを通して、課題設定、課題解決のできる人材育成の目標が達成され、国や自治体、大学・研究所といった環境マネジメント、環境問題の解決に携わる機関への就職者数も多い。また、産学での相乗効果で改良され、人材育成システムが継続的に回るシステムとして定着している点、高く評価できる。

#### 《改善を要する点》

- 修士論文とインターンシップでの研修内容との関連性の周知を一層徹底すべきであろう。また、長期インターン研修と短期インターン研修それぞれの単位認定の内容を明確にすることが望ましい。
- 今後は外部資金に依存せず、受け入れ機関との連携でコンソーシアム的な運営を実現することが望ましい。